



営農NEWS



来年の稲づくりに向けて、収穫後の耕起は早めに行いましょう

イネ縞葉枯病の防除効果やクログワイ、オモダカ、ミズガヤツリなど多年生雑草の抑草効果が期待できます

本年の水稲栽培では、6月下旬～7月中旬が日照不足で経過したが、生育期間を通じておおむね天候に恵まれたことから、ほぼ順調に経過しました。しかし、農林水産統計（9月30日発表）によると、出穂期以降の最低気温が高い状態が続き、粒の肥大が抑制されたことに加えて、8月中旬以降が日照不足で推移したことより、作況指数は9月15日現在で、北部、鹿行は98、県南は96、県西が95のいずれもやや不良で、茨城県として97と見込まれています。

一方、病害虫の発生では、県西、県南地域を中心に、県内広域に徐々に拡大しつつある縞葉枯病が今年も問題になりました。また、夏季が高温のときには常に問題となる、斑点米カメムシ類の発生が多く、いずれも発生予察注意報が発表されました。さらに、イネツトムシがやや多い～多い、ニカメイガ、紋枯病がやや多い発生となりました。また、雑草では全県下で1年草のヒエ類のほか、多年草のクログワイやオモダカなどの発生が課題となっています。

これらの対策として、収穫後の刈り株に生じるヒコバエ（再生稲）が縞葉枯病の秋の保毒源となり、また、媒介虫ヒメトビウンカの生息場所となることから、出来るだけ早く耕起することで、ウイルスを保毒したヒメトビウンカの越冬虫数を低下させる効果が期待できます。

さらに、秋季に耕起することにより、多年生雑草クログワイやオモダカ、ミズガヤツリなどの塊茎形成を妨げ、また、土壌表面に露出させることにより、その後の低温や乾燥で塊茎を枯死させて減少させる効果も期待できます。

このため、収穫後は早めに（多年生雑草クログワイ等を非選択性除草剤で処理する場合は、その効果を発揮した後に）水田を耕起することで病害虫や雑草を抑制し、刈り株やワラを土中で分解促進することによる土づくりに努めてください。

なお、刈り株やワラの腐熟を促進するために石灰窒素を施用する場合は、10a当たり20kg程度を施用し、10月下旬頃までにはすき込みましょう。

参考：水田の難防除雑草クログワイ等の除草対策

多年生雑草のクログワイ、オモダカ等は、長期にわたって発生することや塊茎の寿命が長いことから、難防除雑草の一つです。クログワイは水田で、4月下旬～5月中旬に発生し、地下茎の先に分株を作りながら増殖していき、9月中旬～10月下旬になると、地下に塊茎を形成して翌年以降の繁殖源となります。

一般的には、田植え後に初中期一発剤を処理し、必要に応じて後期剤処理を加えるなど体系処理を行います。しかし、本田で発生が目立って問題になる場合には、さらに、収穫後に下記の処理も行ってください。

- 1 発生が比較的少ない水田では、稲刈り取後の水田を早期に耕起することにより、越冬する塊茎の形成を妨げます。さらに、厳寒期にもう一度耕起することで塊茎を低温や乾燥に合わせ、越冬量を減らす効果が期待できます。
- 2 多発生した圃場では、収穫の際にやや高刈りにしてクログワイ等多年生雑草の茎葉部をなるべく残し、稲わらを持ち出すか薬液がかかりやすくなるように均一に散らしてから、ラウンドアップマックスロードなど非選択性の除草剤をなるべく早く、10月中旬頃までには散布して、越冬する塊茎等を枯死させます。その後に耕起することにより、高い除草効果が期待できます。（令和元年10月1日現在）

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040